

脳卒中

特に「くも膜下出血」について



滋明 西条市医師会会長
米田 脳神経外科
院長

うか？

脳は豆腐のように軟らかい組織で3層の被膜に覆われています。脳の表面には軟膜があり、その外側にくも膜があります。くも膜の外側に硬膜があり、更にその外側を頭蓋骨で囲まれています。軟膜とくも膜の間は髄液という無色で透明な液体で満たされており、外側から見るとくも膜の下というところで、くも膜下腔と呼ばれています。このくも膜下腔に出血したものがくも膜下出血です。

脳卒中とは、脳の血管の障害により突然に「意識障害や手足の麻痺、言語障害などをきたした状態」で脳血管障害の急性期を意味する一般用語です。その原因となるのは大きく分けて「脳梗塞」と「脳出血」と「くも膜下出血」です。脳梗塞とは脳に血液を運ぶ動脈の閉塞あるいは狭窄により血液の流れが悪くなり、脳組織が酸素または栄養不足のために障害された状態です。脳出血は脳組織の穿通枝と呼ばれる極めて細い血管が破れて脳内に出血した状態です。今回は最後のくも膜下出血について説明します。

くも膜下出血とは

そもそも、くも膜下出血とはどのような状態なのでしょう

では、出血の原因はというと、脳動脈瘤の破裂によるものがほとんどです。脳（頭蓋内）の血管は心臓から派生してちようど木の幹のように枝分かれを繰り返しながら先に進んでいきます。脳血管は通常は内膜、中膜、外膜と3層構造をしています。血管の枝分かれする部分に生まれつき中膜がないことがあります。そうするとそこは薄いわけですから血流がぶつかることで、外側に膨らんで瘤のよう

のを形成します。それを脳動脈瘤といいます。その脳動脈瘤が徐々に大きくなり、ついには破裂して出血します。脳動脈瘤はくも膜下腔の比較的大きな血管にできませんが、動脈からの出血ですから大出血をすることになります。そして髄液の中に出血した血液は脳の表面を覆ってしまいます。ですからくも膜下出血は脳の表面の出血ということになります。

わが国では男女ともに40歳代から50歳にかけて発症数が急激に増え始め、発症のピークは男性で50歳代、女性で70歳代です。また、人口10万人に対し1年間で10程度の発症といわれております。ですから西条市では1年間に十数名の方がくも膜下出血を起こしていることになりました。

さて、くも膜下出血を起こすとどうなるのでしょうか？ 約30〜40%の方は即死状態かあるいは病院に搬送されても手の施しようがない状態となります。残りの60〜70%の方が治療の対象となるのですが、再出血を起こすと更に半数以上の方がやはりどうにも処置のできない状態になります。

そして再出血は最初の出血から24時間以内が最も多いのです。そのほかくも膜下出血後に脳血管攣縮といって出血した血液が脳血管に作用して血管全体が細くなつて血液が流れなくなることがあります。これは出血した血液の量にもよりますが、重症の場合は広い範囲の血管が縮んでしまい脳全体に血液が流れなくなり脳組織が死んでしまいます。こうなると当然生命にかかわります。このようにくも膜下出血は生命を脅かす非常に怖い病気です。

治療方法

治療はというと、まずは再出血を防ぐことにあります。それには動脈瘤の根元にクリップをかける「ネッククリッピング」という手術や血管内にカテーテルを挿入して、脳動脈瘤の中にプラチナコイル（細くて軟らかい針金のようなもの）を挿入して、動脈瘤を固めてしまう血管内治療も普及しております。

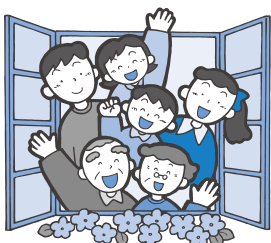
それぞれ利点と欠点があり、各々の状態により使い分けが必要です。

症状

では、くも膜下出血を起こした時はどのような症状があるのでしょうか？

典型的には突然の激しい頭痛です。それも今までに経験したことがないような強い頭痛で「いきなりバットで頭を殴られたような痛み」「頭に雷が落ちたような痛み」などと表現されます。脳梗塞や脳出血は手足の麻痺や痺れ、言語障害などの神経症状を伴うことが多いのですが、くも膜下出血は頭痛や意識障害で発症することがほとんどです。しかし、激しい頭痛でなくても、風邪の症状など特に誘因がないにもかかわらず頭痛が続いている時は、くも膜下出血を起こしている可能性もあります。

ともかく、突然の激しい頭痛みや頑固な頭痛を感じた時は最寄りの医療機関を受診してください。



激しい頭の痛みや頑固な頭痛を感じたら、速やかに受診しましょう。